「文学研究×国語教育」の会 夏期研究集会 資料『注文の多い料理店』教材研究 2024/8/17

韮崎市立韮崎西中学校非常勤講師 山本 富美子

『注文の多い料理店』の教材研究を深める

# 1 ストーリー

イギリスの兵隊の格好をした二人の若い紳士が猟に行った山の中で道に迷う。案内の猟師が消え、連れて行った猟犬も泡をはいて死んでしまう。おなかをすかせた紳士たちは「西洋料理店」を見つけ、中に入る。扉にメッセージがあり、紳士たちはその指示通りに行動し、服の汚れを落とし、鉄砲と弾を手放し、服を脱ぎ、顔にクリームを塗り、酢を自分に振りかける。塩を揉み込むところになって「注文」は自分たちを食べる準備だと気がつく。7枚目の扉の向こうにいる山猫の子分の声を聞き、恐ろしくなり、「顔がまるでくしゃくしゃの紙くず」のようになり、泣く。そこへあの白熊のような犬が吠えながら飛び込んできて、料理店は消える。猟師がもってきてくれた団子を食べ、山鳥を十円買って二人は東京に帰る。しかし、「さっき、いっぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯に入っても、もう元の通りに直りませんでした。」

#### 2 ストーリー上の課題

#### (1) 二項対立の読み 広告ちらしの影響

この作品は以下の牛山恵氏のまとめによるとおり「糧に乏しい村の子供らが都会 文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です。」から「自然対都会、乏し さ対放恣という図式が明確に現れている。そして、自然から都会へ、乏しさから放 恣へと、その反感は向かっている。これが作品の主題であるかのように示されてい るので、読みはこのちらしから自由ではないままに進められてきた。」(牛山恵「自 己回復へのメッセージ「注文の多い料理店」『宮沢賢治童話の世界』 2014 富山房 インターナショナル P104)と広告のチラシの文言から都会の紳士が自然の代表の 山猫に懲らしめられる話、と読まれた。

#### (2) 山猫は紳士と同様とする読み

山猫について田近洵一氏から「生命の侵犯者であるという点で、二人の紳士と同じ次元の存在」(田近洵一「童話『注文の多い料理店』研究」 『日本文学』1977 二十六巻第7号)と山猫の存在が自然と切り離され、紳士と同様とする読みがでた。

#### (3)くしゃくしゃの顔のままであることの読み

戻らなかったくしゃくしゃの顔について「彼らは日常世界のレベルに立ち戻ったとき、山鳥を買うということで金銭による穴埋めをしたのであるが、しかしあのおそろしい幻想体験は、彼らの存在の本質とかかわって、顔の上に消しがたい刻印を残したのである。((田近洵一「童話『注文の多い料理店』研究」 『日本文学』1977 二十六巻第7号)をうけ、「二人の紳士の顔が、東京に帰っても「紙くづ」のようで

元通りにならないのは、それが刻印だからである。二人は「だいぶ山奥」を侵犯し、動物を狩ろうとした罪を命であがなうことは免れたものの、顔に記された紙くずのようなしわを悪行の刻印として引き受けなければならなかったのである。」(牛山恵「宮沢賢治 童話の世界」P190)と動物を狩ろうとした悪行の刻印と受け止められた。

### (4) 犬が生き返ることの読み

「おそらく賢治は、冒頭からファンタジーの世界に一歩踏み込んでいたのではないかと思われる。だから、賢治は山になれているはずの案内人の行方不明、白熊のようなたくましい犬の死といった不思議な出来事を設定し、それを経た後、どうと吹く風をきっかけとして西洋作りの家を現出せしめたのだと思われる。すなわち、この作品は非現実世界の深みへの過程に犬の死を置き、それがよみがえることで現実世界にもどるという設定になっているのだと解釈される。(田近洵一「童話『注文の多い料理店』研究」 『日本文学』1977 二十六巻第7号)

#### 3 「注文の多い料理店」を読むとは

なぜ死んだ犬は生き返ったのか、なぜ紳士の顔はくしゃくしゃのままだったのか。 幻想世界から現実世界へもどることで犬が生き返ると読むことはできても、幻想世界 で起きたことの刻印が現実世界に残ることに無理がある。登場人物の紳士たちにもな ぜ犬が生き返って助けに来てくれたのか、自分たちの顔に何が起こっているのか、わ からない。作品をそのように構成している〈語り手〉がそう語ると指摘するのは田中 実氏である。「語り手」という用語は今までも使用されているが、田中氏の措定する 〈語り手〉は紳士の言動を客観的に俯瞰し、紳士たち自身が気がついていない自分の 有り様や紳士と廻りとの関係などを語り出しているとする。〈語り手〉が意味を持っ て紳士たちの顔は「くしゃくしゃのまま」と語るのである。今まで作品を読むとは登 場人物の世界を読みひたることに重きを置かれてきた。その人物の言動はその人物た ちの理由によっておこるので、正解は作品の中にあると捉えられてきた。だが、田中 実氏は読みは読み手の中に現象するものだから、ストーリーを語る〈語り手〉によっ て仕組まれていることを読むとする。(注1)読み手は「なぜ」と作中の出来事の理由 を求めるのではなく、そのような事態によって表されていることを考える。「死んだ 犬が生き返ったことから考えられること | や「顔はくしゃくしゃのままでしたから考 えられること」などである。今までも紳士たちは犬が死んでも金銭価値にしか意味を 持っていないところや浅ましく食べ物に執着する姿や扉の文字を自分に都合良く解 釈するなどは、〈語り手〉を意識しなくても紳士のエゴイズムは読めた。だが、紳士た ちだけが罰を受ける話なのか。紳士によって表されたエゴイズムが紳士の語られてい る世界を語る〈語り手〉による批評と捉えることで、読み手に読み手も含む人間の姿 であることを気づかせてくれる。さらに〈語り手〉は紳士たちを生かして都会に返し

ている。ここを読むには、私たちは自分を擁護せず客観的に見る立場、(田中氏は「この世の現実の物理法則の通用しない領域」(注2)と述べている)に立つことだ。どんなに利己的に生きる紳士であっても生かされるとはどういうことか。くしゃくしゃの顔とは生きることの凄まじさと感じる。作品を読むことで自分が日頃安易に根拠としてきたことを撃つこと、ここでは生きることについて生徒とともに深めることができればよいのではないだろうか。

#### 4 〈語り手〉を意識して読む

田中実氏による論考「背理の輝き・『注文の多い料理店』論」(注3)においてどう 読まれているか。以下に項目を示す。

- ① 「だいぶの山奥」という領域 二人の紳士が迷い込んだ領域
- ② 扉の仕掛け 二人の欲望
- ③ 山猫の子分 二人の紳士と「対幻想」 二人の紳士の無意識を擬人化した影(シャドウ)
- ④ くしゃくしゃの顔 生命の原理原則の場に初めて直面した恐怖
- ⑤ 生かされる二人 罪業とともにある生の尊さ

最後に田中実氏は「『世界がぜんたい幸福にな』るためには、**大自然・大宇宙の生命の原理・原則、**一人ひとりが自身の生命の原理に立ち向かうこと、ここに『注文の多い料理店』の〈語り〉は向かっています。」と結んでいる。

5 授業はどうするか

田中実氏の論考を受けて須貝千里氏による授業が提案されている。(注4)

「注文の多い料理店」でつけるべき力(学習目標)

# 教育の目的(人間性等)〈価値目標〉

○ (自己や世界、他者を)問い続ける。

#### 単元(題材)目標

- (1)「学びに向かう力」〈態度目標〉
- 〈語り手〉が「紙くずのよう」な「顔」になってしまった「二人の若い紳士」によって提起している問題に向き合う。
  - (2) 「知識および技能 |
  - 反復したり、照応したりしている語句に注目し、その効果について考える。
  - (3)「読むこと」の「思考力、判断力、表現力等」A・B

A「二人の若い紳士」と「山猫」たちの生きている世界の共通点を捉え、そのことによって照らし出される問題について捉える。

B「二人の若い紳士」と「専門の鉄砲打ち」(専門の猟師)、「白熊のような犬」の生きている世界の違いについて考える。

実際の授業では「読む」ことは学習者の中で起こるイメージ化(脳内に立ち上がってくる作品の世界)であるので、授業者は上記の学習課題をふまえつつ、授業の課題は学習者の中から出てきたことを課題として授業を進めるようにしたい。

#### 6 授業研究

2022年に授業を行い、夏期研究集会で報告した実践について再度提案する。

#### 三 授業の実際

### (1)授業の進め方

授業を進めるにあたり、授業者は「物語」を語る〈語り手〉を意識して生徒の疑問を受け取ったり、発問したりするように心がけた。具体的には、生徒が疑問に思ったり、気になったりした叙述は〈語り手〉の仕掛けであることが多いと考え注意深く取り上げることである。生徒が読み取ったことは自分の価値観とちがうことに違和感を覚え指摘しているからだ。その素朴な疑問こそ、常識に馴染んでいる授業者の見えない壁を打ち破るものであると考えている。それゆえ生徒の感じた疑問をそう語ることの意味を考える課題として授業で取り上げる。

本作品でも生徒の疑問を〈語り手〉の自己表出として捉えて発問にすることで、視点人物の紳士がいる物語世界と〈語り手〉の語る世界が意識され、紳士の語られている世界を相対的に捉えることができると考えている。各時間の中では様々な問題点について指摘できるところをあげ、〈語り手〉が語る視点人物の意識、無意識が浮かび上がるよう心がけた。それらをふりかえって最後にもう一度一人一人が考えたことをレポートにまとめた。

### ①最初の感想

A「泡を吹いて死んだのに、生きかえってとびらを突き破って入ってくる。泡を吹いて死んでしまう。白熊のような犬とは。」のように犬の存在が気になった。

B「案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。」のところで、なぜ案内途中なのに二人の紳士を置いて行ってしまったのか。 ちょっとどこかへいってしまうくらいの山奥。山がものすごいとは何かが気になった。

C「紳士」とは社会的地位や教養がある立派な人であるはずなのに紳士がおなかがすいてなにか食べたいと思う。これは紳士の行動かと気になった。また、紳士たちのセリフは「たべたい」が口偏の食べたいになっていたことや、扉の文字には漢字じゃなくてひらがなで「すぐたべられます」となっていたことの意味が気になった。

D西洋料理店はなぜ消えたか。

E「おなかにおはいりください」は、お中にお入りくださいじゃなくてひらがなになっていること。 「お気の毒、とかわざわざご苦労です。」とか「いちいち我慢してください」とか

きていて気を使いすぎだなと思った。

F二人の顔は最終的にどのような顔か。

(中略)

# ⑥ まとめのレポート

授業で話しあってきた課題の中から自分が気になる課題を選び、今までの授業の中で聞いた友達の発言も使って自分の考えを書くように指示をした。

A 最初にこの物語を読んだとき、登場人物たちの構図は、「生き物を殺す人間 vs 自然代表の山猫」だと思った。しかし、話し合ううちにヤマネコは間抜けで、とにかく食べたい欲望がむき出しなことに気づいた。また獣がいない山はヤマネコが全部食い尽くしてしまったからかもしれないことも気づいた。ということはヤマネコは自然の代表ではないと思う。なら自然である「山」は何のために物語に出てくるのだろう。

そこで思い出したのがラフティングの大久保さん(校外学習での講師)がおっしゃっていた「川はしゃべらないから好き」という言葉だ。自然は話さない。だから困っている時も「助けて」と言えないということだ。海や川はしゃべれないから、人が気づかないまま、プラスチックが多く漂うようになってしまった。作者は、そういうことをみんな早く気付いてほしいと思っていたのかもしれない。

B 私は、注文の多い料理店を読んで、欲望のために行動しないで、一回客観的に見ることは大切だなと思いました。なぜかというと、ヤマネコも紳士も、食べたいという欲望のために行動し、結果的に、逃げられたり、すごく怖い思いをして失敗したと思ったからです。(紳士も、最初は怪しいなって思っていたけど欲望に負けてしまっていました)。私も欲望のために行動して失敗した経験があります。小さいころ姉と外で遊んでいたら、ハチの巣があり私たちは突っついてみたいというという欲望にかられました。悩んだ末(蜂に刺されることは知っていました)欲望に負け、つっついてしまいました。それで蜂に刺され痛い思いをしました。これらの経験から私は欲望に負けちゃだめだなと改めて実感することができました。これからは、一回客観的に冷静にものがとみられるようにしたいです。

C 私は、二人の男たちの顔が戻らなくなったのは一度大きな恐怖を味わってしまい、普段の生活が一八○度変わってしまったと思ったからです。

わたしも怖い映画を見た日から、いつもは家の鍵をあまり気にしないけれども鍵のことが気になったり、ひとりで外に行くことが減ったりなどして、一人で行動することができなくなりました。たった一度、されど一度大きな恐怖を味わっただけで、日常生活が一八〇度変わりました。

だから、一度実体験で大きな恐怖を味わった二人の男たちは、いつもは体が休まるお風呂 に入ったとしても元の顔に戻ることがなかったのだと思いました。 D私は二人の紳士はなんちゃって紳士だと思った。理由は、恰好だけが紳士なところ、犬が死んじゃった時も悲しまないで、わざと犬が死んだことをわざわざお金に変えていっているところが紳士らしくないなと思った。中身も紳士の人だったら西洋料理店もたくさん行っていて、マナーとかをたくさん知っていて騙されないと思うから、二人の紳士は田舎のしかも山の中で見栄を張っていたまぬけな、なんちゃって紳士だと思った。

#### 生徒の作文について

Aの生徒は「話さない自然」としたことで自分にとって理解不能であるものの存在、「他者」 を感じたように授業者には受け止められた。

Bの生徒はこの作品に人間の欲望が潜んでいることを感じた。自分にもあったことに思い 至ったところが指摘してあった。自分の無意識に気がついたと感じた。

Cの生徒は自分の「見方」が変わることに気づいた。

Dの生徒は授業で話し合ったことを自分の言葉にしている。表現としては稚拙かもしれないが、授業で読み取ったことを自分の言葉で整理することが大切だと考えている。

# 四 「紳士」を相対化するとは

〈語り手〉を意識しないと通常は視点人物の立場に立って読む。そうすると視点人物に起こる出来事として読む。出来事が問題になり、視点人物の行為は批評の対象とされるが、視点人物のありようは批評の対象にはなりにくい。

今回の授業で生徒たちは授業が進行するに伴い、「紳士」と呼ばれている登場人物のありよう自体に注目するようになった。そもそものきっかけは「紳士」たちがおなかがすいてなにか食べたいということに違和感をもったからだった。生徒が考える紳士とは「社会的地位のある人、教養がある立派な人」という人物のことだ。それがおなかがすいて何か食べたいというのは子どもじみて幼稚な言動に思えたのだ。さらに吟味していくと連れてきた猟犬が泡を吹いて死んでしまっても悲しまないことや猟で動物を仕留めることを楽しみにしていることなどから動物の命を軽視していると指摘した。また、紳士自身は山猫軒を微塵も疑わず、山猫の要求を都合良く解釈していることも指摘された。「紳士」と言う表現と、語られている人物とが読み手に一致せず、「紳士」の行為に違和感が生じるのだ。授業では行為の善し悪しを課題にするのではなく、生徒が感じた違和感を〈語り手〉の「批評」と捉えた発問にしたことで「「紳士」の物語」が語られている空間を意識し「紳士」を相対化できるようになるといえよう。

「紳士」と語られていることの話し合いは人間のありようについて考える端緒であった。 授業の最後のレポートBの「欲望」やDの「見栄を張っていた」という指摘はこの「紳士」 たちのことであるが、人間のだれにもあるもので、いつもは意識していない領域が浮かび上 がったのである。人間の業というようなものである。生徒たちは〈語り手〉の「批評」に対 峙することで、自分自身のあり方にも目をむけたのだと考えられる。

#### 五 〈第三項〉論を踏まえて読むおもしろさ

「文学作品の読書行為」について田中実氏前述の対談においては「〈自己教育作用〉です。 どうやって読み手が〈自己倒壊〉を起こすか、そのサポートをするのが文学教育、文学教育は 〈自己倒壊〉のサポートと考えています。」(注5)と述べる。〈自己倒壊〉とは自分そのもの を打ち壊していくようなことで簡単なことではないが、〈語り手〉の「批評」を取り上げて 作品を読んでいくと、人間の有り様や社会の常識といったことが浮上しそれらに無自覚で あった自分に気づくことができる。くしゃくしゃの顔になったことについて、レポートで C の生徒は自分が日常で感じた恐怖心を重ね、日常の生活さえも経験によってとらえ方が真 反対になることを指摘していた。物事のとらえ方の認識の変化である。自分の認識の変化や 自分の中の無意識や、自分の考え方の根拠に気づく面白さが〈第三項〉論の魅力と考えてい る。この面白さは「主体的な学び」の推進力になると感じている。これから多くの授業者に よって開拓されていくことを望んでいる。

#### (注)

- (1) 田近洵一 木下ひさし 笠井正信 中村龍一 牛山恵 ことばと教育の会編「対談 文学の〈読み〉の理論と教育―その接点を求めて」『文学の教材研究』(教育出版 2014・ 3) P274
- (2)田中実「近代小説の《神髄》―「表層批評」から〈深層批評〉へー」都留文科大学研 究紀要 第95集 2022年3月
- (3)田中実「背理の輝き・『注文の多い料理店』論」『第三項理論が拓く小学校文学研究/ 文学教育』明治図書 P166
- (4) 須貝千里「『注文の多い料理店』の授業構想」『第三項理論が拓く小学校文学研究/文 学教育』明治図書 P182
- (5) 1に同じP290